

12

ポリオワクチン緊急輸入が可能になった背景

— NHK 記者，小児科医，厚生大臣の役割—

加藤 茂孝

保健科学研究所

はじめに 2021年の日本は新型コロナワクチン接種開始の年として人々の記憶に残るであろう。接種が開始されても2年続きのCOVID-19のパンデミックの先行きはまだ明確には見えない。ワクチン輸入の遅れた日本は、先進国の中ではワクチン接種開始が1番遅れた。ちょうど60年前の1961年にもワクチン輸入を巡って日本中が大きく動いた出来事があった。それがポリオワクチン緊急輸入である。

1, **ポリオの流行** ポリオは一般には小児麻痺として知られるが、正式にはpoliomyelitis 急性灰白髄炎と呼ばれ、ポリオウイルス感染後に、感染者の1/100から1/1000において脳の灰白部と脊髄に急性の病変が起きることにより発症する。ウイルスの発見は1909年であり、1949年エンダース J.F. Enders により組織培養法を用いたウイルス分離に成功して、ワクチン開発が始まった。日本では、1910年代に流行が始まって10年毎に3回繰り返されていた。1960年春には北海道から始まる全国流行があり、史上最多の5606人の届け出患者があった。

2, **ワクチン製造の状況** 米国で1954年に不活化ワクチンがソーク J.E. Salk により、続いて1960年に生ワクチンがセービン AB Sabin により開発された。腸管で増えるポリオウイルスの生ワクチンは経口投与で免疫原性が高く、また大量投与が容易である。

3, **記者上田哲の行動とNHKの取り組み** 1961年になってNHKTVでは定時のニュースで、全国のポリオ患者発生数を放映していた。当時は民放が黎明期にありTVと言えばNHKで、その白黒TVを皆が高い視聴率で支持していた。その患者数発表で、社会の関心は高まり特に子を持つ母親の心配は高まっていった。それを主導したのが当時は32-33歳の放送記者上田哲で、後の彼の講演によれば、1961年の患者発生が1000人を記録された日から生ワクチン一斉投与のプロジェクトをスタートさせる準備をしていた。その日は6月16日であった。不安の高まった母親たちは厚労省を取り巻いて生ワクチンを要求した。その状況もNHKTVは放映した。

4, **小児科医平山宗宏のアイデア** 京都大学法学部卒の上田哲にはワクチンの知識はない。彼は小児科医でワクチンに詳しい東大の平山宗宏医師への長いインタビューを行い、生ワクチンの一斉投与こそ、この事態を一気にそして根本的に解決する、つまりポリオ根絶に向かう最良の方策だと確信をもって事にあった。

5, **厚生大臣古井嘉実の決断** 問題は、このポリオ生ワクチンが日本での承認を受けていない事、また、日本では製造されていなくて輸入に頼るしかなかった事の2点であった。当時、大量に生ワクチンを製造していた国はソ連(現、ロシア)とカナダであった。世論の盛り上がりで厚生省への連日のデモによって、承認を待たない試験接種(治験)とソ連とカナダからの緊急輸入と、言う形で実現した。当時の厚生大臣の古井嘉実は「責任は大臣が持ちます」と言明した(6月21日)。そして7月17日にスカンジナビア航空機によってソ連から1000万人分が届き、続いてカナダから300万人分が届いた。7月末から8月末までに生後3か月から5歳までの小児、それに加えて流行地では9歳までの900万人の投与が終了した。投与後患者数は急減して1980年には日本国内での野生型ポリオは根絶された。

6, **なぜできたのか?** 画期的な成功にはいくつかの要因があげられる。①NHKTVの存在の大きさ、②上田哲の弁舌と問題意識、実行力、③科学者との連携、④NHKが一丸化(若手中心にポリオ班結成)、⑤世論を動かした(母親達が厚生省を取り囲む)、⑥大臣の決断、⑦要求がポジティブ(生ワクチンで一斉投与)